

平成21年度 和歌山県名匠

【^て ^す ^わ ^し ^{やす} ^だ ^{がみ} ^{せい} ^{さく} 手漉き和紙「保田紙」製作】

^{くり} ^{ばやし} ^よ 栗林つね代

【現住所】有田川町

【生 年】大正14年

業績及び経歴

23歳から手漉き和紙「保田紙」の製作を始め、61年を経た現在も、有田川町の清水高齢者生産活動センターにて、力強く紙を漉き続けている。

保田紙の歴史は、約390年前の江戸時代に遡る。紀州徳川藩主から命を受けた先人が、工夫苦勞を重ね、完成させたものと伝わる。丈夫な紙質という特徴から、和傘の紙として使用され、地域活力の源となっていたが、昭和30年代頃から機械化や洋紙の進出により衰退していた。そうした中、伝統技術の復興、継承を目的に昭和54年に設立された当該センターで、当初から後継者の育成、子ども達への体験指導等に力を注いできた。手漉き和紙製作の技術を持つ職人が少なくなった今では、その技術を伝える第一人者として極めて貴重な存在となっている。

厚い和紙から薄い和紙まで、注文内容に合わせて様々な和紙を漉く。原料を混ぜ込んだ真水を桁（地元ではカテと呼ぶ紙漉き道具）に挟んだ簀すですくい、揺らしながら思いのままに紙を漉き上げる。原料である楮こうぞと、美しい和紙に仕上げるための冷たい真水は、清水地域の自然と風土がもたらしている。素早い動作でしわなく均一な厚さに和紙を漉き上げる熟練した手業は、長年の経験と勘に裏打ちされたまさに伝統技術そのものである。

平成13年に和歌山県ふるさと名人紀の人賞を受賞している。現在は、県外からの注文も多く、昔は使われなかった襖に使用されるなど、手漉き和紙の良さが再認識されつつある中、こうした手漉き和紙「保田紙」製作の伝統技術保存継承に果たされた功績は多大である。